

〈研究ノート〉デビュー時期における中島みゆきのイメージ
—「時代」を中心に

Research Note: The Image of NAKAJIMA Miyuki in the time of the Debut
A Case Study of a Song *Time Goes Around*

廖 桃
LIAO, Tao

はじめに

中島みゆきというと筆者は「女王」「強い女」などのイメージを思い浮かべる。中国のウェブサイトで中島みゆきを検索してみると、彼女に関しては「マンドポップ¹業界半分以上の歌手を養う女だ」「半分のマンドポップ業界が彼女に影響された」という評価が多く出てくる。それは中島みゆきの歌が最も多く中国語でカバーされてきたからである。日本では中島みゆきについての研究や評論が数多くなされている。それらは詩学・社会学・記号学などの多様な分野でなされたものである。中島みゆきはシンガーソングライターとして、日本でも中国でも広く受け入れられている。そして、中島みゆきを論じる時には必ずその歌に言及している。詩人の天沢退二郎は詩学の視点から、中島みゆきの歌を分析した²。春日井真英は神話的な視点から中島みゆきの歌詞にあらわれる男女関係を論じている³。山内亮史は社会的な視点から中島みゆきの望郷の眼差しを描いた⁴。詩人の鈴木志郎康は中島みゆきの別れ歌のなかの女性像について論じている⁵。これらの先行研究では、中島みゆきの恋愛歌に関するものが多く占めている。また、そうした研究は中島みゆきのデビューから90年代までの時期の歌や記事を中心に考察しているため、中島みゆきイメージの全体像を全面的には把握できていないと思われる。

時代の変化に従って、歌も変わるとみれば、各年代の中島みゆきの歌を全面的に把握し、分析して、中島みゆきのイメージを捉えることが必要であろう。中島みゆきの全歌集は3期に分けて出版されている。それに従って、デビューから今までの中島みゆきを3つの時期に分けられると考える。本稿では、中島みゆきに関する評論や先行研究を整理したうえで、デビュー時期における中島みゆきの代表作である「時代」の歌詞を検討し、大衆が中島みゆきに抱いていたイメージを明らかにする。

1. 中島みゆきについて

中島みゆきは1970年代「わかれうた」、80年代「悪女」、90年代「空と君のあいだに」、00年代「地上の星」と4つの年代でシングルチャート1位を獲得した唯一の女性アーティストである。中島みゆきは画期的なシンガーソングライターといえるだろう。

Jポップ業界における中島みゆきの地位に関しては、島崎今日子の「中島みゆき 孤高の歌姫の『地上の星』」に見ることができる。

¹ マンドポップ：中国語版の維基百科（ウィキペディア）では『華語流行音楽』。すなわち北京語をベースとした標準中国語、華語(Mandarin)によるポップスという意味である。俗に北京語と呼んだりもするが、厳密には同じではない。日本で言うところの標準語と東京弁の關係に似ているそうである。これが香港等で使用される広東語のポップスだと『粵語流行音楽(Cantopop)』、台湾語だと『台語流行音楽(Taiwanese pop)』となる。これらを総称して通常使っているのが『中文流行音楽』、つまり『C-POP』である。(出典：<http://sasanoji.cocolog-nifty.com/blog/2012/06/post-c015.html>,最終閲覧日：2018年2月20日。)

² 天沢退二郎『中島みゆきを求める』創樹社、1988。

³ 春日井真英「右に廻るもの：神話的視野から見える女性」『東海学園大学研究紀要』、(4)、pp.151-170。

⁴ 山内亮史「望郷の眼指しと義への熱情——中島みゆきの社会学」山内ほか『中島みゆきの社会学』青弓社、1988、pp.7-66。

⁵ 鈴木志郎康「別れ際に輝く女の姿」中島/谷川ほか『中島みゆき ミラクル・アイランド』新潮社、1983、pp.65-70。

02年の「紅白歌合戦」で中島が「地上の星」を歌った瞬間は、番組最高視聴率の52.8%を記録。「地上の星」は、足掛け4年にわたりチャート入りを続けロングセラーの記録を打ち立てた。このミリオンセラーにより、70年代、80年代、90年代、00年代の四つの年代においてヒットチャート1位の歌を持つ日本でただ一人のシンガーとなった⁶。

みゆき論の先駆けとなったこすぎじゅんいち、次のように指摘している。

...彼女の歌は自己検証の歌なのだから。この時、彼女は、ほんとうに自由になる。女の情念も、未練も、嫉妬も、その他、自分が嫌だと思っていることすべてを自分の前に曝け出す。その時、彼女は顔をそむけない。そむけないからこそ歌になる。やっぱり強い女だと思う。彼女のことを、人が“魔女”と呼ぶのは、吐く言葉にまとまりがないからではなくて、その強さについてなのだと思う。

(中略) 現代の魔女たちとは、より人間的であろうと戦い続けている人たちのことである。中島みゆきは、歌を通して、その戦列に加わった。多くの人たちが、彼女に鼓舞され、あるいは彼女とともに泣き、そのカタルシスのなかで、明日に向かう力を養っている。⁷

こすぎじゅんいちが中島みゆきを強い「魔女」として捉えている。しかも、この「魔女」とはポジティブな意味を含み、「人間が人間であることに誇りを持った」⁸女である。この論考は中島みゆきを最初に評価したものだと思われ、彼女に対し、「魔女」というイメージだけではなく、「女王」というイメージさえ付与していると言えるのではないか。

中島みゆきの個性について、同時代の女性シンガーソングライターと比較しながら、黒井千次は「女性だけに限ってみても、『ポプコン』からは小坂明子、小坂恭子、庄野真代、谷山浩子、八神純子、あみん、など様々の個性をもつシンガーソングライターが生まれている。しかしその個性の強烈さから見て、中島みゆきは擢んでている。」⁹と述べている。彼は中島みゆきの歌に現れる「真面目」という個性を強調している。また、呉智英は「中島みゆきは中山みゆきである」のなかで、「中島の特質は、若い女性なのに女のうらみ節を歌う点などにあるのではない。中島は近代的自我にとって、条理としてあるように教えられてきた恋愛が、近代的自我にとって最大の不条理になるという逆説を、身を削るようにして歌っているのだ。」¹⁰と論じている。

以上のように中島みゆきはJポップ業界で高い地位にあり、大衆に受け入れられていると言える。また、個人的な魅力に関しても基本的に高い評価がなされているのではないだろうか。

⁶ 島崎今日子「現代の肖像中島みゆき 孤高の歌姫の『地上の星』」『アエラ』2005、18(2)、pp.75-79.

⁷ こすぎじゅんいち『魔女伝説——中島みゆき』講談社、1982、p.130.

⁸ 注7に同じ、p.132.

⁹ 黒井千次「語る女」中島/谷川ほか『中島みゆきミラクル・アイランド』新潮社、1983、p.83.

¹⁰ 呉智英「中島みゆきは中山みゆきである」中島/谷川ほか『中島みゆきミラクル・アイランド』新潮社、1983、p.127.

2. 中島みゆきの歌について

1975年のデビューから80年代末までは、中島みゆきは悲恋歌の歌い手として名が知られていた。しかし90年代からは、「人生応援」を主題とした歌が増えてきた。この変化はどのような現代女性像を伴っているのか。

2-1 中島みゆきの全歌集

中島みゆきの全歌集はデビューから2015年までの時間を3期に分けて出版されている。『中島みゆき全歌集 1975—1986』、『中島みゆき全歌集 1987—2003』、『中島みゆき全歌集 2004—2015』（朝日文庫）である。

2015年11月、『中島みゆき全歌集 1975—1986』第1刷が朝日新聞社から発行された。これは1990年5月に朝日文庫から刊行された『中島みゆき全歌集』を改題した新装版である。

『中島みゆき全歌集 1975—1986』について、谷川俊太郎は「1975年のデビュー以来、哀しくもしたたかな人々の心象風景を歌って、多くのファンの心をとらえ続ける中島みゆき。教科書にも採用されている『時代』。オリコン1位を獲得した『わかれうた』『悪女』などの大ヒット曲の歌詞全178曲を掲載した歌詞集第1弾¹¹と解説している。

『中島みゆき全歌集 1987—2003』について、田家秀樹は「独特の魅力をたたえた楽曲が支持され、4つの年代でシングルチャート1位を獲得している唯一の女性アーティスト・中島みゆき。『空と君のあいだに』『地上の星』などの大ヒット曲から、コンサート『夜会』での発表曲まで含めた全229曲を収録した歌詞集第二弾¹²と解説している。

『中島みゆき全歌集 2004—2015』（朝日文庫）は中島みゆきの2004年から15年の間に発表した作品（180曲）の詞を完全収録している。しかし、この歌集は前の2冊と違い、解説が付されていない。

本稿では、デビュー時期における中島みゆきの代表作である「時代」を中心に分析するため、『中島みゆき全歌集 1975—1986』からその歌詞を引用する。

2-2 中島みゆきの歌の研究

多くの詩人や音楽評論家が中島みゆきの歌に言及している。詩学の視点から中島みゆきの歌を分析しているのは天沢退二郎と歌人の林あまりが挙げられる。

中島みゆきに関して、詩人の天沢退二郎は『中島みゆきを求める』において、「喩の使い手」、「別れうた唄い」、「力づけるもの」と3つのポイントを挙げている¹³。すなわち、歌の言葉使い、歌の物語、聴く者に与えるイメージという過程である。また、失恋を主題としたときの諦め、中島みゆきの詩における喩である「洞察」について論じている¹⁴。

林あまりは中島みゆきの詞について、「信じ切る明るさ」、「コトバの特異さ」、「わかりやすい詞、わかりにくい詞」と3つの部分を挙げて、中島みゆきの詞の内容分析を行っている¹⁵。天沢の分析方法と違うのは、林は、中島みゆきの詞の中の「愛の存在」を探求し、そしてその「愛」の表現方法がどのように言葉を通じて表すのか、言葉（詞）の象徴性を究明している点である。

一方、演劇評論家の松岡和子は中島みゆきが作詞した歌詞を小説として捉えている。

¹¹ 中島みゆき『中島みゆき全歌集 1975-1986』朝日文庫、2015、裏表紙。

¹² 中島みゆき『中島みゆき全歌集 1987-2003』朝日文庫、2015、裏表紙。

¹³ 天沢退二郎『中島みゆきを求める』創樹社、1988、p.129-149。

¹⁴ 注13に同じ、p.150-161。

¹⁵ 林あまり「中島みゆきの詩学 出逢いがしらの愛、そして——」山内ほか『中島みゆきの社会学』青弓社、1988、pp.113-137。

曲想や声の独特の魅力は言うまでもなく、彼女の書く歌詞が「詩」としても良質であることは定評があるけれど、デビュー当時から、ほとんどすべての作品がそれぞれ一編の「小説」に仕立てられそうな世界をそなえていることにも注目したい¹⁶。

松岡は、「喚起力に富んだ中島みゆきの歌を『読む』のは、なまじっかな純文学連作短編を読むことよりはるかに面白い。」¹⁷と称賛した。

80年代後半に入ると、社会学の視点からの中島みゆきに関する研究が登場し始めた。

山内亮史は中島みゆきの歌の3種類の聴かれ方を明らかにしている。1つ目は「これはあの時の私のことを歌ってくれてるに違いない」と、聴く者の個別体験の琴線に直接ふれてくるものである。2つ目は「なんでこんな歌をまともに歌うのだろう」と思わせる、自分とは異次元な歌でありながら妙に心に引っかかるといった類の歌である。3つ目は聴く者の夢や憧れを的確に表現したもので、「いいこというなあ」という感情が起きる歌の場合である¹⁸。また、志賀隆生は記号学の観点から、言葉と意味の関わりに関する2つのプロセスを指摘して、中島みゆきの歌詞を分析した¹⁹。大串夏身は宗教的色彩を帯びる中島みゆきの「変身」について論じている²⁰。安原顯は1982年までの中島みゆきの詞をめぐって、「他者ともっと関わりたいとの人間の欲求が続くかぎり、中島みゆきの詩（歌）は永遠に真実なのである」²¹と指摘している。

以上の四人は、主に1975年から1986年の間に発表された中島みゆきの歌を中心に分析している。

さらに、神話的な視点から中島みゆきの歌詞を分析している論考もある。春日井真英はウーマン・リブからラディカル・フェミニズムの潮流のなかの女性自身を考察する手がかりを探すために、中島みゆきの詩から当時の女性を考察する手段を模索しているが、実際には神話的な視野から男性と女性の関係を考察している²²。

一方、中島みゆきの歌詞の中には、さまざまな職業に就いている魅力的な女性たちがたくさん登場する。歌の中で、彼女たちがどのような女性像として表されているのか。また、この女性たちは中島みゆき自身の映しなのだろうか。

『中島みゆき ミラクル・アイランド』（1983）では、呉智英、鈴木志郎康、坂本龍一などの著名人が中島みゆきについて語っている。巻頭には、谷川俊太郎と中島みゆきの対談が収録されている。また、中島みゆきの別れ歌のなかの女性像について、詩人の鈴木志郎康は次のように評している。

歌謡曲はどちらかというと、思い詰め調だが、フォーク・ソングの中島みゆきの方は、思い詰める気持ちはずしてくれんというわけである。中島みゆきは、好きになった男と別れる時の悲しい気分が好きなので、彼女の歌はすべてその気分がベースになっていると言えるように思う。でもそれで自殺するまで思い詰めるというような

¹⁶ 松岡和子「小説を読むような魅力」中島/谷川ほか『中島みゆきミラクル・アイランド』、新潮社、1983、p.63.

¹⁷ 注16に同じ、p.64.

¹⁸ 山内亮史「望郷の眼指しと義への熱情——中島みゆきの社会学」山内ほか『中島みゆきの社会学』青弓社、1988、pp.7-66.

¹⁹ 志賀隆生「中島みゆきの記号学」山内ほか『中島みゆきの社会学』青弓社、1988、pp.67-98.

²⁰ 大串夏身「いつもちがった風となって、時のなかを…… 中島みゆきのあたらしい世界によせて」山内ほか『中島みゆきの社会学』青弓社、1988、pp.99-112.

²¹ 安原顯「『うそ』と『ほんとの中の真実』」山内ほか『中島みゆきの社会学』青弓社、1988、p.175.

²² 春日井真英「右に廻るもの：神話的視野から見える女性」『東海学園大学研究紀要』、(4)、pp.151-170.

ことは決してない²³。

すなわち、中島みゆきの別れ歌に描かれている女性像は、悲しみに包まれているが、自殺のような自己放棄までには行かないということである。

70年代から活躍しているもうひとりのシンガーソングライターに言及しなければならぬ。その人物は松任谷由実である。評論家たちは中島みゆきの歌を評論する際に、よく松任谷由実と比較している。例えば、音楽評論家の田家秀樹は「ユーミンとみゆき。二人のことを書いてみたいと思ったのは、彼女たちの歌の中にあるドラマを語ることが、七十年代の、そして、今の、男と女のさまざまな関係を語ることになると思ったからだ。彼女たちの歌の中にある“愛のかたち”にひかれたからだった。」²⁴と語っている。この著作は主に中島みゆきと松任谷由実の70年代（二人のデビュー時期）の歌を中心に比較しながら、二人の恋愛観、婚姻観を考察している。論考では、中島みゆきの歌で歌われた「女」のあり方と当時20代だった中島みゆき本人を結び付ける、中島みゆき自身が持つ女性像を捉えている。しかし、一時期の歌から人物像を捉えるという方法では中島みゆきの女性像の全体を捉えることはできないだろう。

島崎今日子は『『わかれうた』の大ヒットで、失恋を歌う情念の歌手と呼ばれるようになるが、みゆきの歌には人の普遍的な悩みや女であることの疎外感が色濃く描かれていて、しかもそこに絶望するのではなく、立ち向かおうという力強さがあつた。何より弱者への共感の眼差しがあつた』²⁵と指摘している。しかし、前述のように中島みゆきは「女王」というイメージさえ付与されている。歌手としての中島みゆきの強さが大衆に認められていたと思われる。それゆえ、彼女の歌でうたわれた「女」は本物の中島みゆきではないだろう。それは中島みゆき自らが見ている虚構の世界の女性像だと考えられる。

以上のように、中島みゆきのデビューから90年までの歌や記事を中心に、詩学、記号学、社会学的な視点から中島みゆきに関する先行研究を整理した。しかしながら、70年代、80年代、90年代、00年代の4つの年代に発表された中島みゆきの歌を包括的に分析した研究はあまり見られない。したがって、各年代の中島みゆきの歌を全面的に把握し、分析して、中島みゆきのイメージを捉えることが必要であろう。

3. 「時代」から見るデビュー時期の中島みゆき

社会学者の見田宗介は流行歌について、以下のように指摘している。

流行歌という鏡は、時代の民衆の心情を平面的に忠実に反映するのではなく、日常体験の様式化・壮麗化・具体化・極限化といった、いくつかの固有の屈折と色彩の傾向性を持っている...時代の心情の記号としての流行歌を解読する際には、鏡の持っている、このような屈折や色彩の傾向性を逆にたどっていったところに、時代の心情の実像を求めなければならない²⁶。

²³ 鈴木志郎康「別れ際に輝く女の姿」中島/谷川ほか『中島みゆき ミラクル・アイランド』新潮社、1983、pp.65-70。

²⁴ 田家秀樹『33回転の愛のかたち あなたはユーミン？それともみゆき？』CBSソニー出版、1984、p.5。

²⁵ 島崎今日子「ユーミン・みゆきその時代 働く女として走り続けてきた女神たちの奇跡と軌跡」『週刊朝日アエラ』、臨時増刊アエラ・イン・フォーク、19(16)、2006. 4.5、p.86。

²⁶ 見田宗介『近代日本の心情の歴史——流行歌の社会心理学史』講談社、1978、p.11。

つまり、流行歌の主題を理解する時、それら（日常体験の様式化・壮麗化・具体化・極限化）の表象のなかで、実像を求めることが大切であろう。

谷川俊太郎の解説から見れば、1975年から1986年まで中島みゆきが「哀しくもしたたかな」²⁷イメージをもって、人々に受容されたと言えるだろう。この時期の中島みゆきはどのように自分自身の価値観を表していたのか。彼女が作詞した歌詞を通じて、人物像を分析したい。

2007年に「日本の歌百選」に選ばれている、デビュー時期の代表作「時代」（1975）²⁸から検討してみたい。

今はこんなに悲しくて
涙も 涸れ果てて
もう二度と 笑顔には
なれそうも ないけど

そんな時代も あったねと
いつか話せる 日が来るわ
あんな時代も あったねと
きっと笑って 話せるわ
だから今日は くよくよししないで
今日の風に 吹かれましょう

まわるまわるよ 時代は回る
喜び悲しみ くり返し
今日は別れた 恋人たちも
生まれ変わって めぐり逢うよ

旅を続ける 人々は
いつか故郷に 出逢う日を
たとえ今夜は 倒れても
きっと信じて ドアを出る
たとえ今日は 果てしもなく
冷たい雨が 降っていても

めぐるめぐるよ 時代は巡る
別れと出逢いを くり返し
今日は倒れた 旅人たちも
生まれ変わって 歩きだすよ

まわるまわるよ 時代は回る
別れと出逢いを くり返し
今日は倒れた 旅人たちも

²⁷ 中島みゆき『中島みゆき全歌集 1975-1986』朝日文庫、2015、裏表紙。

²⁸ 中島みゆき『中島みゆき全歌集 1975-1987』朝日文庫、2005、p.390。

生まれ変わって 歩きだすよ

まわるまわるよ 時代は回る
別れと出逢いを くり返し
今日は倒れた 旅人たちも
生まれ変わって 歩きだすよ

今日は倒れた 旅人たちも
生まれ変わって 歩きだすよ

「時代」は中島みゆきデビュー時期の歌の中で、最も中島みゆき自身の価値観が反映されている歌である。しかも、この歌はその後発表される人生の応援歌の基調となる歌だと考えられている。『中島みゆき大研究』の解説は、「時代」を以下のように紹介している。

「時代」は中島みゆきの代表作のひとつ。みゆきはこの歌をうたって、一九七五年（昭和五〇年）十月十二日の第十回ポピュラーソングコンテストつま恋本選会でグランプリを獲得している。記念すべき一曲である。また、その年の九月に倒れた父親への想いを込めてあるという... いずれにせよ、「時代」は率直な力づけの歌であり、メッセージソングであった。この歌を聞いて、力づけられた人も少なくなかったであろう²⁹。

しかしながら、山内亮史は「こうしたデビューアルバム『私の声が聞こえますか』に見出される「喪失感」はほとんど時代のものであった。」³⁰とデビュー時期の中島みゆきを解説した。そして、「時代の喪失感」について次のように論じている。

このような時代との折り合いをつけられぬ自分や、またこうした時代を生きる流儀など、いわば「どう生きるべきか」の問いかけを含んだ詞が初期作品に多いのは偶然ではない。「私の声が聞こえますか」と畏れながらおずおず投げかけた歌は、時代を背負ってしまったのだ。そしてその名も「時代」に出てくる次のリフレインを自身に課すことで彼女は、「喪失を伴った出発」をすることになる³¹。

中島みゆきの父親・眞一郎は1975年9月に脳溢血で倒れた。同月、中島みゆきは『アザミ嬢のララバイ』でプロ・デビューを果たしている。こすぎじゅんいち「時代」について、「彼女は、脳溢血で倒れた、父に向かって歌いかけたかったのだ」³²と述べている。実際には、「時代」の制作と父親の発症のどちらが先であったかは、不明である。それに従って、『時代』が父親への想いを込めている」かどうかは、検討の余地があるだろう。さら

²⁹ 全日本みゆき族編『中島みゆき大研究』青弓社、1987、p.102.

³⁰ 山内亮史「望郷の眼指しと義への熱情——中島みゆきの社会学」山内ほか『中島みゆきの社会学』青弓社、1988、p.16.

³¹ 注30に同じ、p.22.

³² こすぎじゅんいち『魔女伝説——中島みゆき』講談社、1982、p.93.

に、1975年に23歳の中島は大学を卒業した。その時期の就職は不順であり、そのことから「時代」では新社会人としての視点から人生観について歌っているのではないかと考えられる。

この曲では、前奏から「今はこんなに悲しくて 涙も涸れ果てて もう二度と笑顔にはなれそうもないけど」と導入して、まるで戯曲の序幕のように悲しく、笑いを失った「時代」が始められている。山内氏が指摘しているように、ここには「喪失感」が含まれている。しかし、「そんな時代も あったねと いつか話せる 日が来るわ あんな時代も あったねと きっと笑って 話せるわ」という本文に入ると、こういう「時代」をいつか笑って話せる日がきっと来るとされている。「いつか」はまだ分からないが、その後の「きっと」は積極的に希望を持って未来を見ることができるとをあらわしているのではないか。また、この歌は2つの曲想に分かれている。1つは、「今日は別れた 恋人たちも 生まれ変わって めぐり逢うよ」という、時代がまわることでまた出会える恋人である。もう1つは、「今日は倒れた 旅人たちも 生まれ変わって 歩きだすよ」という、時代がめぐることでもた帰ることができる故郷、または新たな出発点である。

志賀隆生は「時代」について、「それは、立ち止まった（区切りを迎えた）歴史と、流れゆく時間とが交錯し、『まわるまわる/めぐるめぐる』というらせん状の運動の中で、変わりゆく、終わりゆく（あるいは始まろうとする）『時代』をこの歌が捉えたところから発するものだろう」³³と述べている。つまり、終わりは始まりである。ここに、人生の輪廻を見抜いて、勇気をもって「明日」に立ち向かおうとするデビュー時期の中島みゆきの人生観を読み取ることができるのではないか。

また、「時代」の歌詞から中島みゆきの人生観を解釈することは可能であるが、歌の中の世界は虚構の世界のはずである。まわる時代は決して存在していない。そこで、立ち向かおうとする人生観は中島みゆきの真実を描いているのか、または虚構的なものなのか。これから中島みゆきはどのように虚構と現実を往復していくのか、深く検討したい。

4. おわりに

中島みゆきに関する評論は、基本的に80年代に集中している。デビュー時期の中島みゆきの「わかれうた」は大衆に広く受け入れられた。それゆえに、中島みゆきの恋愛観への同時代の評価が高いように思われる。また、中島みゆきのデビュー代表作である「時代」に関しては、父親への想い、時代の喪失感や人生の輪廻を見抜いている人生観などの観点からの論考が存在しているが、新社会人としての人生観、または歌の虚構世界と現実世界がどのように繋がっているのか、深く検討したい。

今後の課題は以下のようになる。

(1) 『中島みゆき全歌集 1975—1986』に収録されている歌を中心として、デビュー時期の中島みゆきへの分析も足りないと考えている。同年代の時代背景を理解するために、新聞記事や歌詞を検討しながら、人物像を分析する。

(2) 『中島みゆき全歌集 1987—2003』、『中島みゆき全歌集 2004—2015』の中の代表作を整理し、その時代背景を検討して、年代が変わるのに伴い、女性像もどのように変化しているのかを究明する。

³³ 志賀隆生「中島みゆきの記号学」山内ほか『中島みゆきの社会学』青弓社、1988、p.77.

参考文献リスト

日本語文献

- 天沢退二郎『「中島みゆき」を求めて』創樹社、1986.
大串夏身/見目誠/谷口孝男『中島みゆきの場所』青弓社、1987.
こすぎじゅんいち『魔女伝説——中島みゆき』講談社、1982.
三枝和子『恋愛小説の陥穽』青土社、1991.
全日本みゆき族『中島みゆき大研究』青弓社、1987.
田家秀樹『33回転の愛のかたち あなたはユーミン？それともみゆき？』CBS ソニー出版、1984.
中島みゆき『中島みゆき全歌集 1975—1986』朝日文庫、2015.
『中島みゆき全歌集 1987—2003』朝日文庫、2015.
『中島みゆき全歌集 2004—2015』朝日文庫、2015.
中島みゆき/谷川俊太郎ほか『中島みゆきミラクル・アイランド』新潮社、1983.
見田宗介『現代日本の心情と論理』筑摩書房、1971.
『近代日本の心情の歴史——流行歌の社会心理学』講談社、1978.
『現代日本の感覚と思想』講談社、1995.
三好章人『中島みゆきの精神世界—あなたに問いかけるもの』たま出版、2005.
広瀬正浩『戦後日本の聴覚文化』青弓社、2013.
細見和之『ポップミュージックで社会科』みすず書房、2005.
山内亮史/志賀隆生/大串夏身/林あまり/安原顯『中島みゆきの社会学』青弓社、1988.
春日井真英「右に廻るもの：神話的視野から見える女性」『東海学園大学研究紀要』、(4)、1999.
島崎今日子「ユーミン・みゆきその時代 働く女として走り続けてきた女神たちの奇跡と軌跡」『週刊朝日アエラ』、臨時増刊アエラ・イン・フォーク、19 (16)、2006.4.5、p86.
「現代の肖像 中島みゆき 孤高の歌姫の『地上の星』」『アエラ』、18 (2)、2005.1.3、pp.75—79.

中国語文献

- 陆正兰『歌词学』中国社会科学出版社、2007.
桂艳玲 胡俊「日本流行歌曲歌词研究综述」『语文学刊』、(06)、2014.
王梅「现代流行歌曲流行、发展之思考」『湖北函授大学学报』、(J605)、2009.
晁春莲「日本流行歌曲在中国的传播与接受」『日本学习与研究』、(04)、2011.